

23 ソ連の日本研究 (文学・経済学・歴史学)

ユリア・ミハイロバ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所)
イリーナ・レベデバ (同 上)
ネリー・レシチェンコ (同 上)

(1) レニングラードの日本文化、文学、歴史に関する現在の研究

ユリア・ミハイロバ

レニングラードの日本研究、主に東洋学研究所レニングラード支部の現在の動向を検討する。

レニングラード(前 St. Petersburg)は、ソビエト日本研究の最も古い中心地である。1736年に、カムチャッカに遭難した日本人が講師となり、日本語学校が組織された。又レニングラード(Petersburg)大学の日本語コースは、1870年代にできた。

レニングラードの東洋学研究所は、写本や古書の収集で世界的に有名な、アジア博物館とのむすびつきで、1930年代に組織された。日本に関してのものは4000冊あり同規模の収集は、レニングラード大学の東洋学部図書館にみられる。これらの日本語の膨大な写本、古書の収集は、レニングラードの文化史、古書研究の主な手引きとなっている。

経済や政治のような現代的な問題に関しては、主にモスクワで研究されている。

現在、レニングラード支部には、11人の日本研究専門家がいる。1950年、60年は、日本語の写本と古書の収集に関する記述と収集目録作りがなされた。この目録は、60、70年代に6巻本として出版されている。それ以来文化史の研究は、次第に発展してきた。

M. Vorobjov は、日本文化、国家の起源というテーマの権威者である。彼の著書『古代日本』(1958)、『日本；200—600』(1980)は、ロシアの専門家の間で広く読まれている。

昨年から Y. Mikhailova は、古代から明治維新までの日本の天皇制度の歴史とイデオロギーに関する研究を日本国家の初期の形だけでなく、神話・神道の儀式も取り扱って、はじめた。彼の論文「大嘗祭(天皇権力の性質)」は、東洋を扱った主要雑誌、『Narodi Asii i Afriki』(1989)に研究成果を発表している。

その他の重要な研究テーマは、日本とロシアをふくむヨーロッパ文化の比較はもちろんのこと、日本と東アジア、太平洋地域文化の文化の相違である。これは、日本文化の類型学ともいえる。

日本の中世史研究は、あまり発展していない。鎌倉、足利時代の人々の動向に関する研究をしている V. Klimov が、機関唯一の専門家である。彼は、階級闘争の観点からでなく、

広く文化的背景から検討している。

研究所の中のもう1人の歴史家、Z. Haninh は部落民の問題を研究している。レニングラード大学には又、徳川日本に関する2人の歴史家もいる。

日本文学の研究は、レニングラードの日本研究の主流と考えられる。東洋学研究所の日本学部長、V. Goreglya 教授は、翻訳家、日本古典文学の研究者として知られている。『徒然草（翻訳）』（1970）、『日本文学の日記と随筆；900—1200』（1975）、『紀貫之』（1983）等の著書が出版されている。

G. Ivanav は、明治、大正文学を研究している。現在では、19—20世紀初頭の日露文化の接触にも興味をしめしている。15年以上の間、Y. Sviridov は、説話文学の世界に関する研究と、近い将来出版される松本清張による小説を翻訳している。A. Kabanov は、文化、観念、美学面が凝縮された五山文学に注目した。又、レニングラードとモスクワの学者達による共同研究をもとに2巻の日本文学史が、もうすぐ出版される。

レニングラード大学には、5人の日本文学専門家がいる。「徳川時代の読本」(I. Melnikova)、「二葉亭四迷とロシア文学」(T. Zoktoeva)、「戦後の日本文学」(G. Maksimova)等の研究がある。日本部門に入学する生徒の数は、毎年東ヨーロッパからの生徒を含め、5—10人である。

最近の日本研究の特徴は、宗教と思想史の研究への興味がふえていることである。Goreglyad 教授による「仏教と日本文化；700—1100」のような仏教に関する論文、若い学者、N. Borshzersk の天理教に関する論文(1989)、その他 A. Kabanov は、鎌倉仏教に関する翻訳や、百科辞典の本文、「五山の構造と禅宗の官僚主義」(1988)を書いた。

又、数人の学者が思想史に興味をもっている。1986年、K. Mapandja は、荻生徂徠の儒学エッセー「Bendo and Bemmei」に関する修士論文を書いた。彼女は、日本の神道と儒教の相互影響に焦点をあてている。この分野においては、Mikhailova が1989年に10年間の研究成果、本居宣長についての本を書いている。

1930年代、N. Konrad は、明治日本の思想史を研究し、その後70年代 V. Kobets と Y. Mikhailova によって引き継がれた。彼らは、日本啓蒙と自由民権運動の代表者、福沢諭吉の修士論文にとりくんだ。この年、Mikhailova は、「日本の社会思想史；1860—1880」のテーマに関するそれまでの研究をすべてまとめた。その他、東洋学研究所のレニングラード支部の日本研究者による共同研究成果「日本社会思想史のいくつかの断面；1600—1800」(1990)も発表された。

上記のレニングラード日本研究は、20世紀はじめの伝統的な日本研究分野へ、影響を与えている。これは、ペレストロイカ導入のあとあらわれた「歴史への新しい意識」と一致する。

「歴史への新しい意識」のその他の特徴は、ヨーロッパ中心主義の拒絶である。例えば明治時代の啓蒙は、西洋思想と概念のきまりきった単なる普及とみなされ、自由民権運動は、ヨーロッパの中産階級市民の民主主義革命を基準に、評価される。「日本の社会思想史；1860—1880」では、そのような研究方法すべてを拒否している。

ペレストロイカのおこった年、ソビエトの歴史家達は、宗教研究の必要性を認識した。長い間、宗教が過去に属し、現在の世界は、世俗的なものとしていたので、宗教研究は無視されていた。しかし東アジアでは、文化的、政治的要因としての宗教の役割は、重要である。

レニングラードの日本研究者は、上記の観点から仏教と神道の考察をおこなった。しかし、神道の儀式、民間信仰、日本文化の形成においてのそれらの役割についての研究は、まだ不十分なものである。最近では、神話の構造上の分析方法が、ソビエトではひろがっている。レニングラードの東洋学研究所において、韓国神話研究者達により、構造分析方法は、広くつかわれたが、日本研究者達は、誰もまだこの方法を応用していない。これは、今後の課題の一つである。

ペレストロイカは、国際的接触の新しい可能性をひらいた。現在ソビエトの学者達は、いろいろな種類の国際会議とシンポジウムに積極的に参加するだけでなく、共同研究、出版の分野において、外国人学者との協力を将来楽しみにしている。

(2) ソビエトの日本経済研究

イリーナ・レベデバ

現在、日本経済研究をしている主な科学センターは、東洋学研究所と、ソビエト科学アカデミーの世界経済・国際関係機関 (IWEIR) である。各々約10名の研究者がいる。加えて、モスクワ州立大学やカバロフスクの経済研究機関でも1、2名の研究者によって、研究がおこなわれている。ソビエトの日本経済に関する研究は、1950年代にはじまった。1970年代、80年代に日本経済に関連した約40冊の本が出版され、日本に関するたくさんの論文とエッセー、日本人学者による評論が、ソビエト定期刊行物に掲載された。

1970年代はじめから、日本文学のための特別な欄が、『日本年鑑』にできた。この年鑑には、著名なソビエト学者や若い研究者達も、著者リストにのっている。「本国と外交政策」「経済と科学技術」「イデオロギー、社会学、文化」の3分野にわけて論文が収集されている。日本の学者による多くの論文、統計と情報の補充もまたのっている。

日本経済を学問的に研究することは、実用的な面でも非常に重要である。ソビエトは、ペレストロイカ政策を実施している。文化、イデオロギー、科学、社会的な面で、非常に進歩しているが、経済に関しては、皆無である。

経済的なペレストロイカは、経済メカニズムの再構築である。私達は、この転換の概念を念入りに実現させていく上で、効果的、活発な経済統制と市場関係の結合を組み立てた、日本を含む海外の経験を取り入れる。

東洋学研究所と IWEIR の日本経済部門は、日本の経済のしくみのいろいろな側面を研究している。実際に即した結論は、USSR Planning Committee, the Communist Party Central Committee, the Council of Ministers そしてソビエト経済政策の発展に関連するその他の官庁に提出されている。

最近、ソビエトの行政のいろいろなレベルで、日本の経済経験への関心がふえている。経営に関する領域の日本の業績に高い評価が与えられている。同時に日本経済を研究する態度

に変化があらわれた。産業、家庭廃棄物の利用のような日本経済経験の個人的な部分のみを研究するのではなく、全体として日本経済の仕組み、主にプランと市場の結合を研究する重要性を感じている。この推論をひきおこしたのは、日本の戦後経済発展の経験である。日本は、資本主義世界の中で、科学技術革新の経済効果、適応性、融合のレベルがぬきんできている。

東洋学研究所と IWEIR は、日本の経験からソビエト経済に借用できることを学ぶため、日本の経済メカニズムを研究しはじめた。

東洋学研究所の日本経済研究部門には、1990年にでた、『日本—経済成長の変化のモデル』と題した本がある。この本は、ある程度1970年代から80年代の日本経済研究部門の研究成果で構成されている。実際、著者リストには、この部門のすべての研究者がのっている。この本では、1970年半ばが、日本経済の戦後の発展のターニングポイントだという結論にたどりつく。すなわちこの年が、重要な日本経済発展のはじまりであるという。新しい発展段階のモデルと古いモデルの違いは、供給源の基盤の変化である。1970年初頭の科学とテクノロジーは、日本経済成長の主な要因である。そしてかなりの量的削減と質の向上という経済成長の内容にも変化がある。この結論は、1970年代と80年代の間に日本経済におこった進歩をもとにひきだされる。

日本経済研究部門の研究者達は、それぞれ特有の分野をとりあつかい、研究の結果を本の中で、論じている。1980年後半には、『日本産業の構造的変化』『日本の科学とテクノロジーの進歩の主な傾向』や、ここ1、2年の間には、『日本の農業—1980年代の問題』『日本経済発展の中の情報源の役割』等、多量の本が出版された。

1980年をはじめ以来、『日本での科学とテクノロジーの発展』と題された論文の収集シリーズは、ソビエトで3冊出版されている。このシリーズの著者リストには、学問機関の学者だけでなく日本経済の様々な分野を研究している産業研究機関の学者達も含んでいる。

東洋学研究所の日本経済部門は、「国民経済の統制」「経済発展の一般的問題」「日本の科学と民族学的な進歩」「日本の海外経済関係」「日本の会社経営」の主な研究分野をおいている。加えて、「日本経済発展の経験」と題された小冊子シリーズの出版計画をはじめようとしている。このシリーズの中には、ソビエトにとっての適応性という観点から日本経済経験の最も重要な面に関係した7もしくは8の小冊子を含んでいる。このシリーズは、いろいろなレベルで専門家や経営者の実際上の助けとなるであろう。

IWEIR の日本経済部門は、個人で書かれたたくさん本を出版しているだけでなく共同研究もしている。最近では、「日本の21世紀への門出」と題された新しい共同研究をしている。この本は、マクロとミクロ経済学のレベルで多くの日本におこった進歩、価値への新しい研究方法を提案している。

最後に将来の計画を手短かにのべたい。日本の経済成功のメカニズムを理解するために経済を研究するだけでなく、歴史、文化、行動心理学ももちろん研究しなければならない。「日本の現象—経済、政治、文化、社会面の包括的研究」と題する共同研究計画がある。ここ2、3年でこのプロジェクトを完成させたい。

(3) ソビエトの日本史研究

ネリー・レシチェンコ

1734年、St. Petersburg で日本について書かれた初めての本『日本に関する記述』が、Caron Francois によって著された。1857年には、I. Goshkevich による日露辞典がだされ、その他、数冊の日本史に関する本も出版された。

明治維新後、明治維新やそのあとに続く改革についての論文シリーズが、いろいろな種類の機関紙にのった。I. Mechnikov の日本の啓蒙時代に関する2つの論文が、1905年に出版され、1902年、Petersburg で『日本大改革時代』が A. Zibolt によりフランス語から翻訳、出版された。

日露戦争の頃、日本への関心が増し、日本の生活のいろいろな側面について多くの論文をうみだした。『日本の出版目録—1734年から1917年にかけて出版された文学作品』(1965)の中にこれらの出版物の一覧表をみつけることができる。

20世紀はじめ、日本史の研究は主に Petersburg とレニングラードで実施された。1950年には、モスクワで東洋学研究所が組織された。歴史、文学、言語学、経済の日本研究専門家達は、その日本部門に集まった。

1950年、60年代は、日本史研究の最も熟した時期であり、この頃、歴史を補足する興味深い本があらわれた。その中で、最も顕著なものは、日本人と西洋人学者による多大な調査と著書にもとづいて書かれた、『日本近代の概要』(1958)である。この本は16世紀から世界大戦にかけての日本の歴史的、社会的生活の進歩の包括的、詳細な分析を行っている。出版以来、30年経過したにもかかわらず、この著書は、科学的な価値を失っていない。この研究論文は、学者たちにとって刺激になり、1960年、G. Podpalova が『1600年後半から1700年はじめの農民一揆』を出版した。これは、社会経済史、農業システム、小作農の生活状態に関しての研究である。この中の3分の1は、幕府と農民一揆の記録から成り立っている。

1961年には、日本封建都市についての、ロシアでははじめての本が出版、1965年には、A. Galperinによる『後期封建主義における日本社会政治史の概要』がでた。

Galperin は、農業の影響によって、15世紀からどのように日本経済が変化したかに関する膨大な資料を収集した。

1960年終盤は、歴史的問題から、現代に関する研究へと変わり始める転換期であった。これは、戦後の日本によって達せられた経済発展の成功による。

科学、テクノロジーの驚くべき進歩をとげた唯一のアジアの国での「日本現象」は、ソビエトを含む、世界中の学者をとまどわせた。1978年には、歴史的事象だけでなく経済についてもとりあつかった『日本の歴史；1945—1975』が出版された。

日本の政党についての『自民党の役割とその政策』(1967)、『創価学会—公明党』(1972)や国際的な活動についての『日本と国際連合』(1975)も分析、研究されている。

その他のテーマについてもソビエトの学者達は、関心をよせている。1974年、日本文化の源である古代・中世美術に焦点をおいた『古代日本文化』が、N. Joffan によって出版され

た。『日本文献目録；1917—1958、ソビエトにおいてロシア語で刊行された日本文学』『日本文献目録；1959—1973、ソビエトにおいてロシア語で刊行された日本文学』の中に、1917—1973年の間に出版された、日本に関する書物の一覧表がある。又、1980年代に書かれた日本に関する本は、非常に多様である。1984年 Leschenko が、『マルクス主義の日本人学者による著作の中の明治維新』を出版した。結びにおいて日本、ソビエト、アメリカ、イギリス人の視点からの明治維新の歴史的記述が著されている。

すべての学者が、1867—1868年の時期を近代日本発展の出発点とする。「日本資本主義発展過程における、内的、外的要因の相互関係」「日本社会の内なる可能性」等が論争されている。M. Sutyagina は、『三菱』（1973）『住友グループ』（1979）をだし、それらのグループの戦後の発展に関心をよせた。しかしながら、同じような商業支配層である三井については、何も著述されていない。すなわちソビエトの日本に関する研究の経済史に関しては、まだ白紙の部分がある。

L. Gruishelyova の『日本文化の形成』（1986）は、日本文化形成の過程の社会政治面を扱っている。公的レベルだけでなく民間信仰における仏教、神道の相互影響と交流に関しては、A. Mesheryakov 『古代日本：仏教と神道—混合主義の問題』（1987）で分析されている。

又、歴史上の人物に関する伝記的研究は、過去へのよりよい理解につながる。1984年、A. Iskenderov は、豊臣秀吉の伝記を出版した。

ソビエトの科学アカデミー東洋学研究所以外で、日本史は、モスクワ大学のアジア・アフリカ機関で研究されている。

ペレストロイカの頃、歴史研究の一部としての日本研究は、改革の途上にあった。自由討論や違った観点を示すというような新しいペレストロイカによってひらかれた可能性は、定期刊行物「Narodi Asii i Afriki」の中の、社会・経済構造のトピックに関する流れをつくりだした。

東洋研究のペレストロイカは、アジアについての古い議論を修正し、今日、議論は社会、経済構造理論を取り扱う、全く新しいレベルになっている。

現在、議論の主な項目は、東洋の国々の社会経済、政治の進歩を研究して、ヨーロッパ中心主義をうちまかすことである。

モスクワにある東洋学研究所の日本部門の史学科は、現在日本中世史、日本文化史、国民的行動科学、天皇制、神話学、世界史の中の日本の位置、17—18世紀の日本社会経済史、日本の新しい社会の形成等が研究されるべき新しいテーマとしてある。この科の研究者達は、世界史の独自の観点から、日本史の問題を分析しようとする「検討すべき日本史の問題」というテーマのもとに共同出版を準備している。